

Shannon's Way における恋と結婚の障害

中 村 豪

Love and Obstacles to Marriage in *Shannon's Way*

Takeshi Nakamura

Abstract

The theme of this study is *Shannon's Way* as love story: the hero and the heroine's love and the obstacles to their marriage. The novel was written by a Scottish writer and physician, A. J. Cronin (in full Archibald Joseph Cronin, 1896-1981) and published in 1948. The setting of the story is chiefly Winton, a fictitious city based on Glasgow. The hero is Robert Shannon, a twenty-four-year-old poor but excellent researcher and doctor whose ambition is to be successful in medical science by a great discovery. He falls passionately in love with Jean Law, who is one of his students at a university and who is attracted to Robert. They love each other. Robert wants to marry her by all means. There are, however, two serious obstacles to their marriage. One is that they belong to different churches. Robert is a Catholic and Jean is a member of the Brethren, a Protestant denomination. The other obstacle is that Jean has a fiancé named Malcolm Hodden, a young and devout teacher, who is treated like a family member by the Laws. The novel has a happy ending: Robert and Jean will be able to marry.

This paper discusses the features of the two major characters, their religion and attitudes to it. It also explains how they suffer from the differences of religion, mental conflicts, quarrels, and other hindrances such as the strategies of Jean's father to keep his daughter away from Robert. The purpose of this paper is to make clear Shannon's way of life, the importance of religion to Christians, the opposition to mixed marriage, and Cronin's messages to readers.

Cronin's best novel is probably *The Citadel*. It is very interesting and epoch-making because of the hero's character, his relations with other major characters, and its revelation of medical problems. The reason why I chose *Shannon's Way*, not Cronin's masterpiece, is that it is unique and important and almost unprecedented in that it makes use of religion as an obstacle to marriage, while in the case of other famous English novels, the obstacles are usually the characters' social positions, personalities, thoughts, economic status, or some insuperable problem other than religious matters. To readers, especially those who face difficulties related to mixed marriage, *Shannon's Way* may offer some good advice.

1¹

Shannon's Way (邦題『青春の生きかた』) は英国の作家クロニン (Archibald Joseph Cronin, 1896-1981) が 1948 年に発表した小説である。主人公はロバート・シャノン (Robert Shannon) という名の医師にして細菌の研究者である。小説の冒頭では 24 歳である。作品標題は「シャノンの生き方」を

表す。視点は1人称（主人公）で書かれている。第1編（BOOK ONE）から第4編（BOOK FOUR）まで、全4編から成っている。物語の展開する期間は1919年12月5日から1921年10月までで、舞台はスコットランドのウィントン（Winton、架空の地名でグラスゴー〔Glasgow〕がモデル）とその近辺に設定されている。なお、*Shannon's Way*は、クローニンの*The Green Years*（1944、邦題『孤独と純潔の歌』）の続編に当たる。後者は、ロバートの8歳から18歳までの少年時代を物語る。肺結核で両親を失ったロバートが母親の、スコットランドの実家で成長する様子を描いた教養小説である。視点は1人称（主人公）である。続編を正しく理解するためには、*The Green Years*を一読する必要がある。

*Shannon's Way*のテーマは、ロバートの研究とヒロインのジーン・ロー（Jean Law）との恋である。二人は、医学という共通分野に生きることが契機となって出会い、恋に落ちる。最初はジーンがロバートに接近し、熱烈な恋愛関係が生まれる。二人の観劇の場面やマーキンチ村（the village of Markinch）へのツーリングの情景描写、協力し合って実験に従事する場面を読むと、結婚が自然な帰結のように思われる。

ロバートは結婚を切望する。しかし、二人の間には結婚の障害が立ちはだかっている。その障害は、ジーンにとってより深刻なものである。最大の壁は、宗派の違いである。ロバートはローマ・カトリックの信者であり、ジーンはプロテスタントである。ロバートにとって、宗派の違いは重要ではないが、ジーンには致命的な意味を持つ。また、ロバートの親族は曾祖母のみであって、ほぼ自分の意思によって伴侶を選ぶことができるが、ジーンの場合は家族関係が強力である。しかも、彼女にはマルカム・ホッドン（Malcolm Hodden）という婚約者がいる。ロバートとジーンの結婚を実現するためには、その障害を克服しなければならない。その問題が、二人の重要な葛藤である。

この小論のテーマは*Shannon's Way*における主人公ロバートとジーンの恋と結婚の障害である。作品の結末では二人の結婚が確実になるが、その幸福な結末に辿り着くためには二人は軋轢と葛藤を経験しなければならない。主として、この二人の特徴や信仰、恋と結婚の障害を論じることによって、混宗婚（mixed marriage）²を実現するための苦難を明らかにすることが目的である。キリスト教における宗派の違いの意味や何が二人の結婚を可能にするのかという点も説明する。

以下、論じる項目は、1. ロバート・シャノンの特徴、2. ジーン・ローの特徴、3. ロバートの信仰する宗教と彼の宗教観、4. ジーンの信仰する宗教と彼女の宗教観および父親ダニエル（Daniel Law）の宗教性、5. ロバートとジーンの恋と結婚の障害、および6. 障害の消滅、である。1. では、ロバートの性格と生き方を分析する。2. では、ジーンの性格と生き方を分析する。1. と2. を扱う理由は、恋愛の当事者である人物は結婚に値する人物であるか、結婚を望むことの妥当性が認められるか、この二人が読者から見て結婚にふさわしい人物として描かれているかを検証するためである。言い換えれば、作品の結末に説得力があるかどうかを論じるためである。例えば、オースティン（Jane Austen, 1775-1817）の*Pride and Prejudice*（1813、邦題『自負と偏見』）で、エリザベス・ベネット（Elizabeth Bennet）の結婚相手がコリンズ氏（Mr Collins）になったり、ブロンテ（Charlotte Brontë, 1816-1855）作*Jane Eyre*（1847、邦題『ジェイン・エア』）のヒロインがセイント・ジョン・リバーズ（St John Rivers）の求婚を受け入れたらすれば、作中人物の特徴を理解した読者は納得しがたいと感じるであろう。したがって、クローニンの作品の場合も、特に主要人物の特徴を把握する必要がある。

続いて3.では、ロバートの信仰する宗教の立場とその宗教に対する彼の姿勢を分析する。4.では、ジーンと彼女の家族やマルカム・ホッドンが信仰する宗教の特徴を説明し、この人物たちの宗教的態度や見解を説明する。5.では、結婚の障害を論じる。6.では、その障害がどのように消滅したのかを論じる。本論で論じる項目は以上である。結論では、本論のまとめや本作品に込められた作者のメッセージ等について述べる。なお、クローニンや彼の作品の研究書や論文は我が国ではほとんど発表されていないようである。そこで、本論の前に、クローニンについて簡単に紹介する。

2

クローニンは、1896年、スコットランドのダンバートンシャー（Dumbartonshire）のカードロス（Cardross）に生まれた。父親はカトリック、母親はプロテスタントだった。クローニンが7歳の時に父親が死去したので、一家は母親の実家に戻った。彼が通った学校はプロテスタント校だったため辛い経験をする。グラスゴー大学を卒業してから、医師として出発し、開業医を務めるが、病気を患いスコットランドで静養する。静養中、*Hatter's Castle*（1931、邦題『帽子屋の城』）を書く。この第一作で驚異的な成功を収め作家に転向する。次々に作品を発表し人気作家の地位を確立する。映画化された作品も少なくない。その後、家族を連れて渡米しアメリカで暮らす。やがてヨーロッパに戻り、スイスに移住し、25年間スイスの地で作家活動を行う。1981年、スイスで没した。

クローニンについて、ある事典には、生没年や代表作等の外に「やや感傷的な人道主義を特色とし、多くの愛読者をもつ」と説明されている。³ 作風については、彼の作品にはモーム（William Somerset Maugham, 1874-1965）との類似性が認められるものがある。例えば、クローニンの *A Thing of Beauty*（1956、邦題『美の十字架』）とモームの *The Moon and Sixpence*（1919、邦題『月と六ペンス』）はテーマに共通点がある。人気の点では、モームとクローニンの関係は、ディケンズ（Charles Dickens, 1812-1870）とサッカリー（William Makepeace Thackeray, 1811-1863）の関係を想起させる。これは、クローニンとサッカリーの評価が不当に低いと言い換えても良い。クローニンの作品は大半が日本語に翻訳されており、かつては人気を誇っていたが、現在ではすべて絶版になっている。この人気の凋落は、筆者にとっては不思議な現象である。人気低迷の理由は、あるいは、20世紀のイギリスの外の主要作家に比べて、彼の文学的重要性ないし価値が低いとみなされる傾向によるのかもしれない。⁴ そのような傾向が生じた理由については、次の指摘が役に立つ。

Cronin に対する評価は、Maugham の場合と似ている。[中略] その評価ははっきりいって Maugham 以下である。そして彼にあたえられる評価は、Scotland 出身のカトリック作家であり、通俗作家というレッテルである。近年イギリスで注目を集めている一群のカトリック作家たち Greene から Spark にいたる人びとの中でも、Cronin はむしろ孤立しているかに見える。その理由を考えると、Scotland のカトリック教徒という地位が、彼の評価をさまたげているのではないだろうか。つまり Scotland では、長老教会以外の教徒はいちじるしい偏見があたえられ、このことは彼の自伝小説 *Adventures in Two Worlds* の中で詳しくのべられているが、決してこの事実と彼の評価の低さとは、無縁ではないと思う。⁵

この説明は、「クローニンの評価が低いのは、スコットランド出身のカトリック作家であることが主因である」と集約できよう。カトリックのイギリス作家としては、この引用に挙げられているクローニンやグリーン（Graham Greene, 1904-1991）、スパーク（Muriel Spark, 1918-2006）以外に、チェ

スタトン (Gilbert Keith Chesterton, 1874-1936) やウォー (Evelyn Waugh, 1903-1966) が有名である。クローニンを除いて、これらの作家はそれぞれ高い人気と評価を獲得していると言えよう。しかし、クローニンの場合はイギリスよりもむしろアメリカでの人気が高いことと、⁶ グリーンはイングランド国教会からカトリックに改宗した作家でありながら、人気が高かったことを想うと、イングランドの人々はスコットランドに対する偏見から解放されていないのではないだろうか。

筆者は、文学作品は個々の作品についてその価値を論じるべきであって、ある作家を、一般論として大衆文学または通俗小説の作家という枠に入れることは間違っていると考ええる。どのような作家であれ、傑作の外に佳作や駄作を残したケースの方が多いと言える。

クローニンは、モームのみならずグリーンにも似ていると言える。それは、これらの3名の作家は純文学的な作品と娯楽本位の大衆的な作品の両方を著しているからである。⁷ ちなみに、クローニンには、日本の作家では、遠藤周作 (1923-1996) を想起させる面がある。両者とも、カトリック作家であるという点と、深刻なテーマの作品 (例えば、遠藤周作の1966年の『沈黙』) に加えて大衆的な小説 (遠藤周作の『ユーモア小説集』等) も著したからである。クローニンの作品のテーマは、宗教の問題、社会問題、芸術対宗教の問題、病院制度や医療環境の問題等、多様である。

3

本章のテーマはロバート・シャノンの特徴である。彼はリーヴンフォード (Levenford, 架空の地名でダンバートン [Dumbarton] がモデル) で育ち、ウィントン大学 (the University of Winton) で医学を修め、第一次世界大戦中の4年間は軍医として艦船で勤務し、その後、ウィントン大学の病理学部で働く。彼の言動から判断できる性格は以下になる。最初に長所から挙げることにする。なお、彼の信仰については第5章で述べる。

以下がロバートの長所である。

(1) 宗教の話題は避けること

人前で宗教について触れることは敬遠する。これは賢明な態度である。彼のその方針は、ジーンが彼を『『イエス・キリスト』の演奏』 (the performance of the Messiah) に興味を持たせようとして、下宿のミス・ベス (Miss Beth) と話していたとき、*“since I [Robert] had, for reasons of my own, a particular reticence towards religious matters, I fixed my gaze upon my plate.”* (15)⁸ と書かれていることから明らかである。*“a particular reticence towards religious matters”* が彼の宗教問題に対する寡黙さを表している。*“reasons of my own”* については、具体的には書かれていない。しかし、その理由は、*The Green Years* の中に見出すことができる。例えば、宗派の違いが原因となって、少年時代にプロテスタントの学校で虐待されたことや、彼が育てられた祖父母の新教徒ばかりの家で最初は孤独な生活を強いられたこと、宗教不信に陥るような出来事を経験したこと、自分の宗教に対する疑問ないし迷いを抱いていたことが、宗教についての寡黙な態度の原因であると解釈できる。

(2) 自己実現の意欲と向上心が旺盛であること

貧困も苦にせず、医学の分野で世の中の人々を仰天させることを目標に黙々と努力する。この特徴は、*“But I [Robert] was young, only twenty-four, passionately bound up in my work, burning with the painful ambition of a silent and retiring nature, longing, in my poverty*

and obscurity, to astound the world.” (22) に如実に窺うことができる。なお、ロバートは、開業医として働く意図は全然持っていない。その理由は、開業医の場合、研究に割く時間が確保しがたいという事情によるようである。それは、第3編で、ロバートがパートタイマーを務めた、マザーズ (James Mathers) 診療所の多忙さを想えば理解できる。

(3) 勤勉・精力的・自立的

元気旺盛で、自分の研究に没頭することが幸福で、長時間の仕事にも懸命に取り組む。実験室に閉じこもるときの姿勢は、忍耐の模範、研究者の鑑と呼ぶことができる。しかも、実験室の環境が厳しい場合でも、仕事に専念できる。例えば、第2編で彼が勤務したダルネア小病院 (the Dalnair Cottage Hospital) では廃棄同然の部屋を実験室として利用したし、第3編で利用した実験室 (ある単科大学の分館) も決して十分な設備の部屋とは言えなかったが、その部屋で大きな成果を収める。ただし、勤勉過ぎたため無理が祟って卒倒したことは減点要素と言えるかもしれない。また、自立心に富み、生活力が旺盛である。失業しても、他力本願に生きようとしたりはせずに、自分で就職活動に励む。ウィントン大学を辞職したときも、ダルネア小病院から追放されたときも職探しの努力を惜しまなかった。

(4) 実直

ウィントン大学を辞職して経済的に困窮したとき、下宿代を支払うことができず滞納していたが、自分の顕微鏡を入質して完済する。研究の必需品であるから本当は大いに悩んだはずであるが、義務を優先したと言える。また、交通事故で負傷した少女を、マザーズの診療所を借りて治療したが、彼が少女の親から受け取った謝礼を正直にマザーズに差し出す。マザーズはその行為に対して、“‘You’re the first straight assistant I’ve ever had.’ (173)” と言って賞賛する。“You” はロバートを指す。

(5) 友情に篤いこと

親友アレックス (Alex Duthie) の息子サイモン (Simon) がジフテリアで重態になり、ロバートの勤務先の病院に入院したのは、アレックスの懇願によるものだった。ロバートは緊急手術を引き受けるが、それまで重大な手術の経験は皆無だったので、自信がない。しかし、手術は成功する。次に、友人スペンス (Neil Spence) の妻ミューリエル (Muriel) とローマックス (Adrian Lomax) との破廉恥な関係を知ったとき、ロバートはスペンスに同情し、その幸福を守るためにミューリエルを諷める。二人の関係をスペンスに漏らしたりはしない。また、後に、妻から離婚を要求されて傷心のスペンスがロバートを訪れたとき、実験が重大局面にあったにも拘らず、親身に対応する。

(6) 信頼性が高いこと

友人は言うまでもなく、恩師のチャリス教授 (Professor Wilfred Challis) から信頼され高く評価されている。チャリスはウィントン大学の前学部長で、人望の篤い、ロバートが模範と仰ぐ、高齢 (70 歳代) の研究者である。大学を去ってからも、ロバートの面倒をみる。また、ダルネア小病院の看護師長ミス・トラジャン (Miss Trudgeon) は、最初はロバートと意見が対立したこともあるが、結局は彼の技量を認めざるを得ない。マザーズ医師も同様である。

(7) 拝金主義と無縁であること

研究を最大の使命と心得て、収入は等閑に付す。そればかりか、食事用のなけなしの資金を、以前に通っていた教会に献金をするだけの度量がある。それは、顕微鏡を入質し、下宿代を支払った後に生じたお金で、最初は1ヶ月ぶりに充実した食事をレストランで取るために使う予定だったが、急に

寄付したものである。また、マザーズと比較すると、マザーズは仕事によって富を蓄積することを無上の喜びと考える人物でロバートと対照的である。ただし、守銭奴ではない。したがって、マザーズは、ロバートが退職を申し出たとき、報酬の増加や将来の優遇をどれほど提案してもロバートの決意が動じないことを知ると全く信じられない。

(8) 医師として優秀であること

優等の医学博士の学位を持ち、リスター金牌 (the Lister Gold Medal)⁹ を授与された。その他にも幾つか資格や賞を獲得している。彼が医師としての手腕を発揮し証明したのは、サイモンの命を救った場面においてである。急患として入院したサイモンは、まったく絶望的な状態で死にかけている。気管切開が必要である。しかし、ロバートの病院には手術室も設備もない。彼は、最初、手術を断るが、アレックスの懇願を受け、手術を決意する。経験不足の不安に悪戦苦闘しながら、手術を成功させる。また、彼は、(4) で触れたように、交通事故の現場に遭遇し、トラックに轢かれて重傷を負った少女に応急手当を施して救助した。救急車の到着を待っていたら彼女は絶命したに違いない。

(9) 自分に対する客観性

自分を “the villain Shannon” (126) と批判的に呼ぶことがあるが、これは、第三者から見れば彼が悪漢になるという自覚である。また、次のように反省することによって自分の非を認めるだけの客観性を持っている。

So I [Robert] had been wrong there also. It was like me to think the worst of everyone. I'd misjudged the matron [Trudgeon], too, fought with her, distrusted her. That was my special quality, getting on the wrong side of people, acting against convention and the grain of decency, standing against the universe, belonging to no place, and to no one, but myself. (264-65) (下線は筆者)

これは、ジーンの容体が重大な局面を迎えたとき、看護師のピーク (Effie Peek) が献身的に看護に尽くしたことをトラジャンから聞いたときの反省である。引用中の “there” は、ピークの仕事ぶりについての彼の評価を指す。彼はそれまで、ピークは看護師失格と断定していたが、ここで認識を修正する。

長所の (5) で既に述べたが、彼はアレックスの息子サイモン [シム] の手術に成功する。しかし、ピークの過失が原因でサイモンは死んでしまう。その理由を知ったロバートは、ピークに対して、“Call yourself a nurse. Hell and damnation, it's enough to make a cat laugh. If you stay on here, I'll see you get it in the neck. You ought to be hanged for what you've done. Think that over the next time you want to slink away from your patient for a cup of tea.” (141) と激しく罵倒した。“what you've done” は、彼女がシムの部屋を離れて軽食を取ったことを指す。その間にサイモンは死んでしまった。その後の、ロバートの1時間以上の手当もむなしかった。しかし、トラジャンの話を聞いて、彼はピークに対する評価のみならず、トラジャンに対する判断も誤っていたことを悟る。彼はすべての人の最悪の面ばかりを見て、あらゆることに反抗し、自分だけを頼りに生きるという性格だったことに気づいている。

(10) 温厚

無益な衝突を避けるために、人に穏やかに接しようと努める。例えば、トラジャンとチェッカーを

したとき、彼の實力は相手より格段に上であるが、あえて負かしたりはしない。この性質は、作中で “I [Robert] was not easily aroused, in fact my nature was retiring and inoffensive, I believed profoundly in universal tolerance, in that blessed motto, “Live and let live,” yet now a reddish haze swam up before me.” (49-50) と書かれていることから明らかである。彼のモットーは “Live and let live.” である。なお、ロバートの性質については、“My [Robert’s] nature was reserved and secretive,” (17) という説明もある。“reserved” と “secretive” は “retiring” と “inoffensive” と同類の意味を表す言葉であり、いずれも彼の美点とみなすことができよう。無用の摩擦を避けるためには、“Silence is golden.” が最善の方策である。

次に彼の短所を列挙する。

(1) 虚言

ロバートはジーンに対して、自分の出自や経歴を偽る。例えば、彼は富裕な貴族の家柄の出身であるが、孤児になったと本当の境遇を述べてから、自分のために用意された仕事より医学の道を選んだため身内から勘当され、先祖の家への出入りを禁じられたのだと偽る。また、戦時中の軍医としての経験についても、退屈な生活に脚色を加えて、劇的な冒険談を捏造した。信仰についても、ジーンの父に訊かれたとき、相手と同系統の教会に属していると解釈できる返答をして誤解させる。ただし、宗教についての嘘は、ロー一家との無用の摩擦は控えたいという配慮が働いていたので、一概に短所と決めつけることはできない。この点については、ロバートの信仰の章でもう一度触れる。彼の主な虚言はこの2回である。

(2) 激越

ロバートは、通常は穏やかであるが、一旦感情的になると抑えが利かない。例えば、ジーンがロバートの嘘を責め真相を暴露したとき、彼の怒りは爆発する。しかも、その口論のあげく、“In fact, you [Jean] can go to hell.” (58) と罵るが、これは言い過ぎである。この応酬が元で二人はしばらく絶交する。また、ダルネア小病院を病院の運営委員会のメンバーたちが視察したとき、ロバートは秘密裡に利用していた病棟について非難される。その際も自制心を失って逆上する。それが原因で病院を去らなければならない。ロバートが怒るときの様子はシェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) のコリオレイナス (Coriolanus) に似ている。コリオレイナスも、怒らせると徹底的に不平・憤怒・憤懣を吐き出すタイプである。それは、彼が護民官を相手に激しい毒舌による非難を浴びせる場面 (第3幕第1場と同3場) から知ることができる。

(3) 独善性・自己本位

この性質はロバート自身が認めているが、彼は自分の研究を重視するあまり、ジーンに対する配慮が不足していた。その点に気づくのは、彼女の医師の学位試験前日のことである。その場面で、ロバートが興奮しながら自分の研究が成功したことを話しても、ジーンには元気がない。彼女は試験に自信が持てない。ロバートは、自分の仕事に夢中になり過ぎていたため、ジーンの試験については事務的な助言をただけで、本気で世話はしなかったことに気づき、ジーンの不安を聞いて深く後悔する。良心が咎める。ジーンに “I’ve been a selfish brute.” (117) と言って謝罪しなければならない。また、彼は自分の独善性を、第4編第8章 (長所の (9) で引用済) で自覚し反省する。そのような性質は、特に、“That was my special quality, getting...myself.” (長所 (9) の引用の下線部) から知ることができる。

(4) 軽率

彼の最大の軽率な行為は、ジーンとの約束を破って、節欲を持続できなかったことである。この行為以外に、例えば、第4編第9章冒頭で、彼宛の伝言メモを火中に投じたという軽率さがみられる。そのメモはウィントン大学の接客係スミス (Herbert Smith) という男から電話があったという内容だった。そこには“Urgent”と書かれていたから、スミスに電話をすれば用件が直ちにわかったはずである。

また、彼には、外にも短所とみなすべき側面が見られる。例えば、貧しさのためとは言え、服装に無頓着 (ウィントン大学勤務中は軍服を着用) だったり、カトリック信者であることを自認しながら、ローマックスに対して、“I [Robert] admit I’m not a shining example...quite the reverse, in fact. All the same, there’s something that I can’t ever get away from...against reason if you [Lomax] like...I hope you don’t wish me to say that I regret it.” (29-30)¹⁰ と認めたりする点である。さらに、本気で訪問する意図はなかったのに、ジーンの実家への招待に応じて、歓待され、しかも、その帰途に自己嫌悪に陥ったことも短所に数えられる。

以上、ロバートの代表的な長所と短所を挙げたが、これは彼の性格の二面性と呼ぶことができよう。このような性格は、主として、少年時代に親身の指導を惜しなかったロバートの教師リード (Jason Reid) やロバートの親友ギャヴィン (Gavin Blair) および母方の曾祖父ガウ (Alexander Gow) の影響によって形成されたとみることができる。リードは博学の青年教師でロバートの学業を熱心に支援した。ギャヴィンは、ロバートと共通点の多い成績優秀で知的な少年だった。ガウは、ロバートがローモンド・ビュー (Lomond View, ロバートの祖父母の家の名前) で暮らした少年時代に信頼し依存し愛した老人である。ガウは、フォルスタッフ (Sir John Falstaff)¹¹ の末裔のような人物である。決して模範的ではない、欠点と失敗の多い性格であるが、愛すべき老人である。ロバートが大学に進むことができたのは、ガウが全遺産 (彼に掛けられていた保険金) をロバートに遺贈したからである。ロバート自身、ガウの影響を認めている。

なお、ロマンティックな性質も彼の特徴の一部である。例えば、ダルネア小病院で働いていた頃、試験勉強中のジーンを不意に訪問してマーキンチ村へ誘い出したり、骨董店で緑のネックレスを買ってジーンに贈ったり、マザーズ診療所勤務の時期に、マツユキ草をジーンにつけてやったりするという振る舞いにそれが表れている。

このように、ロバートはさまざまな性質を持つが、彼の特徴は、概して善良である。公明正大で寛大である。人を裏切ったり不義理を働いたり権謀術数を弄したり名声のために他人を犠牲にしたりすることは絶対にない。チャリス教授のような人格者から信頼されている点からも、ロバートにあっては、長所が短所を十分にカバーしていると言えよう。したがって、この主人公の魅力を否定する、Dale Salwak の、“According to traditional norms of storytelling, he [Robert] should be the villain; at any rate, he is certainly unattractive.”¹² のような意見は認めることができない。

ジーンとの恋愛関係においては、過度に情熱的だった面があり、一時的な過ちを犯したが、致命的なものとは呼べない。それは、トム・ジョーンズ (Tom Jones) 的な過失だった。トムは浮気をしたが、ソファイア (Sophia) と結婚できたではないか。¹³ ロバートは、アッシャー (Hugo Usher) やローマックスにみられるような俗物性とは無縁であり、医学の研究に専念する。高潔な生き方である。

彼は、ジーンと結婚する資格を備えており、結婚は少しも不思議ではない。彼女にふさわしい相手とみなして良い。

4

本章のテーマはジーン・ローの特徴である。年齢は正確にはわからないが、大学3年生であることから20代初めの女性とみて良いと思う。ジーンには、弟ルーク (Luke Law) の外に、アグネス (Agnes) という名の姉がいる。アグネスは、西アフリカのクマーシ (Kumasi) のセツルメントで既に5年間看護師として働いている。そのセツルメントは彼女の宗教団体の組織である。ジーンも、医師の学位を取得したらすぐに同じ場所へ医者として行くことになっている。

ジーンは、純真で気取らず若々しく潑刺としたところがあり、清潔である。田園を背景にすると特に美しい。

資質については、彼女は聡明で有能、善良で勤勉である。聡明さは、ロバートが彼女のレポートを点検したときの “‘This [her paper] is well above pass standard,’” と “‘In fact, it’s extremely good.’” (ともに17) という賛辞からわかる。また、ロバートとの関係が原因で、一度は失敗した医師資格試験も、二度目には優秀な成績で合格したことが高い知性を証明している。有能さについては、ロバートが、彼の助手を務めたジーンの仕事ぶりに対して “As I [Robert] had foreseen, her neatness and careful accuracy were of the utmost help to me, especially in preparing the hundreds of slides which it was necessary to examine.” (183) と述べている。ロバートが新しい伝染病を発見できたのは、ジーンの忍耐強く献身的な助力があったためである。

次に、彼女はその善良な性質により、家族は言うまでもなく周囲の人々からも同じように好かれている。ジーンも家族を愛している。特に母親は彼女にとっては “the best in the whole world” (180-81) である。また、彼女がロバートを愛していることは言うまでもない。結果的には、彼女の愛情はロバートに全面的に捧げられることになる。

次に、ジーンの特徴として、性格の二面性を挙げることができる。彼女の二面性について、ロバートが次のように指摘している。これは、第3編で、ロバートの実験が成功したとき、彼とジーンがレストランで祝宴を開いた際の場面からの引用である。

As I [Robert] bent towards my companion [Jean], now so bright and animated, with flushed cheeks and mischievous, laughing eyes, I saw more clearly than ever before the dual nature of her personality. The grave, devoted little Calvinist was gone, and from beneath that imprint of her upbringing, there emerged a warm and vivid creature who, having taken off her hat, leaned her elbows intimately on the table and surrendered unconsciously to her instincts as a woman. (193)

ロバートが言うとおりの、ジーンは、一方では、快活でいたずらっぽいところがあるが、他方、真面目で熱心なカルヴァン派の信者としての性質を示す。この二面性は、陽性対陰性、行動的対思索的、積極的対消極的、能動的対受動的という対比で表現することもできる。また、ロバートがジーンを観劇に誘ったとき (第2編第3章)、彼女の宗派は芝居のような娯楽は避けるという理由で最初は辞退されるが、そのときのジーンの印象を “Weighing down the scale against her [Jean’s] natural inclination, so vivid and ardent, were all the sad and sombre teachings of her childhood,

these austere warnings against the world, those apocalyptic prophesies of doom.” (96) と書いている。ここでも、彼女の生来の性向は活発で情熱的と書かれており、これが二面性の一方の面であることがわかる。“sombre teachings” 以下は、清教徒的気質を指している。

概して、ジーンは家族の下にあるときには、禁欲的で敬虔な信者として家長に従う。おとなしく控えめで従順な娘として振る舞う。しかし、ロバートと一緒にいる時間は、宗教から解放されて、女性としての天性に従って本領を発揮する。自由闊達で知的で行動的で意志の強い面が表れる。このような二面性は、彼女の信仰に起因するようである。ブレズレン (the Brethren) の信者としての義務を意識し自分の信仰に忠実に生きようとするため二面性が顕著に表れる。

以上、ジーンの特徴を挙げたが、彼女には短所に相当する点はほとんど見当たらない。信心深く、誠実で、勤勉な性格で、ロバートに対して無償の献身的な助力を提供する。生き方は真摯である。誰からも愛される。したがって、ロバートを最愛の人物として慕う限り、また、信仰の相違を超えることができるなら、ロバートとの結婚が自然である。

5

本章では、ロバートの信仰する宗教と彼の宗教観を論じる。既に述べたように、彼はカトリックであるが熱心な信者とは言えない。ジーンがダニエルに同伴して伝道活動を行うほど宗教的であるのに対し、ロバートは、彼の長所の1番目として挙げたように、宗教については寡黙で淡泊である。彼は、ジーンの実家での晩餐の場面でダニエルから宗派を問われたとき、ダニエルと同じ側の宗派であると答える。その答えは、ロバートの短所の(1)「虚言」の箇所で既に触れたことであるが、ロバートにはダルネアのような小さな町の宗派間の確執についてよくわかっていたので、自分の本当の宗派を話した場合に生じるかも知れない騒動を避けるためのものであったと書かれている。また、ロー一家を二度と訪問するつもりもなかったので、自分の宗派を偽った。彼にとって、宗教の重要性は高くない。時に宗教心が目覚めるのか、自分の教会に献金をするが、日常生活では宗教とは疎遠である。彼の人生で最優先するものは医学の研究である。なお、彼が宗派の違いについて寛大であることについては7章で述べる。

ここで、スコットランドにおけるカトリックの立場についてみておきたい。そうすることによって、ロバートの宗教的立場が明確になるからである。『図説 スコットランド』は、「スコットランドの諸教会について」という項目の中で、カトリック教会について説明している。以下、その説明の一部を引用する。

1560年と67年の宗教改革後、カトリック教会とその体制は、政治的にも、法的にも国家の保護を失った。宗教改革側によって一挙に進められたこの政策転換に、カトリック聖職者、貴族、民衆の組織的な抵抗は起こらなかった。[中略] カトリック勢力にとっては、18世紀後半まで冬の時代が続いた。1760年にはハイランドや島部を中心に、カトリック人口は3万人と推定される。

19世紀になると状況が激変した。まず1829年のカトリック解放法によって、政治的権利を回復した。¹⁴

このように、19世紀以降はカトリックの状況は好転するが、カトリックの境遇がプロテスタントと同様の心地よさを享受したとは思われない。スコットランドの体制教会は、長老主義の、プロテスタント系のスコットランド教会 (the Church of Scotland) である。¹⁵ なお、『21世紀 イギリス文化

を知る事典』は、「スコットランド教会はスコットランドにおける国教会であるが、イングランド教会とは異なり、政治的には国家から独立した存在である」と説明している。¹⁶ この作品で描かれる1919年から約2年間の時代もその教会が優勢だったので、カトリックにはなお厳しい時代が続いていたとみて良いであろう。カトリックの立場はプロテスタントに比べて不利で弱いものであったに違いない。例えば、クローニンの自伝的小説 *Adventures in Two Worlds* の中にその裏付けが見出される。クローニンは次のように書いている。

In that era bigotry was rampant throughout the west of Scotland. On such days as commemorated, for example, the birth of John Knox and the anniversary of the Battle of the Boyne, I saw racial and religious hatreds stirred to the dregs, witnessed the bitter antagonisms of the sects, knew only the worst side of Christianity. In this wilderness I wandered alone, a solitary little boy, swept by doubts and fears, desperately striving to prove to myself the truth of this faith which was so derided and despised.¹⁷

この記述によって、彼の少年時代の、カトリックとプロテスタント間の反目は相当激しかったことがわかる。この引用中の“that era”は、混宗婚をした彼の両親の結婚後から彼の学童時代までを特に指している。ジョン・ノックス（John Knox, 1514頃-72）は「スコットランドにおける宗教改革の指導者で歴史家。ピューリタニズムの創始者の一人、長老主義の先駆者」¹⁸ である。ボイン川の戦い（the Battle of the Boyne）は、「1690年7月1日、アイルランドのボイン河畔で、ウィリアム3世のイングランド軍とジェームズ2世支持のアイルランド軍が戦った戦闘。結局ウィリアム軍が勝ち、ジェームズは再びフランスに逃れた」。¹⁹ “the sects”は、カトリックとプロテスタントを指す。また、“this faith”は、カトリックの信仰のことである。上の文中で、クローニンはキリスト教の最悪の面を知ったと述べており、嘲笑され軽蔑されるこの信仰の真理を証明しようと必死に努めたことが明らかである。

最後に、ロバートの宗教観を説明する。それは不安定である。宗教の意義や役割を肯定も否定もしていない。一応カトリックであるが、懐疑的な眼でキリスト教をみている。キリスト教を捨てたわけではないが、敬虔な信者ではない。その理由は、彼の15歳頃の少年時代の痛ましい出来事に求めることができる。彼は、当時、大学進学を可能にするマーシャル奨学金の試験を受けたが、最終日の試験の目前にジフテリアにかかって受けられなかった。もし、病欠しなかったなら合格は確実だったので、そこで神に対して不審の念を抱いた。次に、同じ頃、不慮の鉄道事故で、無二の親友ギャヴィンを失った。その事故によって、ロバートは神の存在を否定する。彼は、それまでは模範的なカトリック信者であったが、これらの出来事以後は宗教から遠ざかる。青年に成長しても、ロバートはその出来事を決して忘れてはいない。このような背景があるため、ロバートは宗教についても“Live and let live.”という信念を適用していると解釈したい。彼がジーンの宗教に対して寛大な態度をとる所以である。

6

本章のテーマは、ジーン・ローの信仰する宗教と彼女の宗教観およびダニエルの宗教性である。彼女は、自分の信仰について、“we [Jean and her family] belong to the Brethren in Blairhill”

(19) と明言している。ブレズレンは非国教徒の「プリマス・ブレズレン」(Plymouth Brethren) を指している。²⁰ ある事典は、“Plymouth Brethren” を次のように説明している。

A Christian religious body so named because its first centre in England was established by J.N. Darby at Plymouth in 1830. Their teaching combines elements from Calvinism and Pietism, and emphasis has often been laid on an expected Millennium. They renounce many secular occupations, allowing only those compatible with NT standards (e.g. medicine). Controversies on the human nature of Christ and subsequently on Church government led to a division in 1849 between the ‘Open Brethren’ and the ‘Exclusive Brethren’. Their numbers declined sharply in the later 20th century.²¹

この引用中の J. N. Darby はダービー (John Nelson Darby, 1800-1882) で、ブリタニカの事典には、「イギリスの神学者。アイルランド教会の聖職者であったが、国家からの宗教の独立を主張して、国教会を退き (1827)、初期キリスト教会の簡素を求めて、同士たちと 1830 年頃プリマス兄弟団を結成。(以下、略)」という説明が見える。²² “NT” は “New Testament” を表す。プリマス・ブレズレンの特徴は、カルヴァン主義と敬虔主義の両者の要素を併せ持つこと、至福千年を重視すること、多くの世俗的な職業を放棄することである。また、『改訂新版「世界の宗教と経典」総解説』²³ は、「プリマス兄弟団^{ブレズレン}」という項目の中で、創設年や信徒数等を述べてから「とりわけ重視するのは朝の集まりで、そこではパンをちぎって次々と手渡される。これはクリスチャンの一致の象徴であると同時にキリストの死を表わす行為でもあるからだ」と解説している。この説明中の、パンをちぎって手渡すという行為が宗教的に重要な意味を持つことが、ダニエルの職業 (パン製造・販売) の理由となる。ダニエル自身、ロバートに “‘You [Robert] are probably aware, Mr. Shannon, of the scriptural significance of the article we produce. You will mind how the Saviour multiplied the loaves to feed the multitude, how He broke bread wi’ His disciples at the Last Supper.’” (43) と伝えている。これは、ロバートがジーンの家で晚餐に与ったときの場面での台詞である。プリマス・ブレズレンは信者の職業を限定するが、パンを焼くという仕事は宗教的な価値と意義が大きいので、ダニエルは自信と誇りを持って従事している。ジーンが医師の道を選択した理由も、引用の “They renounce many secular occupations, ...with NT standards (e.g. medicine)” から納得できる。なお、「オープン・ブレズレン」は「クリスチャン・ブレズレン」とも呼ばれる。²⁴

以上の説明によって、ブレズレンとダニエルの宗教的特徴が理解できる。また、ダニエルについては、作品中で “He [Daniel] was, indeed, a veritable Paul, righteous and valiant, with a gleam in his eye which cowed the evil serpent before he crushed it beneath his heel.” (125) と述べられている。ダニエルは、正しく “Paul” (Saint, 聖パウロ ((?-c 67)): 異邦人へのキリスト教伝道に努めた使徒; 新約聖書中の 14 通 ((または 10 通)) の手紙 ((パウロ書簡)) の筆者)²⁵ のような廉潔で勇敢な人物である。また、この作品の語り手が次のように指摘している。

Tolerance was a forbidden weakness, indeed, a word he [Daniel] did not understand. If one were not “saved” then, alas! one was eternally damned. This it was which for years had kept his daughter [Jean] upon the stony path, saved her from the iniquities of dances, card playing and

the theatre, reduced her reading to *Good Words and Pilgrim's Progress*, and now, by the exercise of prayer and pressure, had wrung from her that tearful promise to renounce her unworthy lover [Robert]. (125)

引用中の“*Good Words*”は「聖書、神の言葉」を意味すると解釈できる。*Pilgrim's Progress* (1678, 邦題『天路歷程』)は英国のバニヤン (John Bunyan, 1628-1688) の著した宗教的寓意物語である (正式には *The Pilgrim's Progress*)。ダニエルは、いわば、旧約聖書の教えを自ら実践している人物で、近代文明を拒否し、自分の子供たちに対してプリマス・ブレズレンの教条を当然のこととして受け入れさせようとする。しかも、暴君的な家長ではないから、ロバートにとっては余計に手強い相手である。自分の信仰が絶対正しいとする信念を持って、伝道活動に従事する信者である。清教徒的に娯楽を避けることを教え、読書の種類も限定している。ジーンの宗派では、トランプ遊びもダンスパーティーも観劇も許されない。

この小説の語り手は、ダニエルが文字どおり名裁判官のような人物であることを、“Oh, wise, resourceful Daniel. In fact, a Daniel come to judgement.” (126) と述べている。この“a Daniel”は「(ダニエルのような) 聡明で高潔な人」の意味で、“Daniel”は聖書外典中の人物である。なお、“a Daniel come to judgement.”はシェイクスピアの *The Merchant of Venice* (1596-1597, 邦題『ヴェニスの商人』) の引用 (第4幕1場) である。

ジーン之父は娘を愛しており、彼女が同じ宗派の相手と結婚することによって幸福な生活に入ること望んでいる。その相手は、マルカム・ホッドン以外に考えられない。彼は、ジーンの幼馴染みの青年教師で、ジーン之父のダニエルを連想させる性格の持ち主である。しかし、ロバートにとっては、“a bitter pill to swallow” (122) であり、ロバートとは性格が正反対の人物とみなすことができる。ちなみに、ジーン之弟の“Luke”という名は新約聖書に見える名であり、ジーン之姉の“Agnes”という名は304年頃ローマに生まれた、殉教者で聖女の“Agnes”と同名であるから、ロー一家の宗教性を象徴した命名と解釈できる。但し、ルークには信心深さは全くと言ってよいほど認められない。

ここで、彼女之宗教観を説明する。ブレズレン之熱心な信者になったのは、父親之感化によるとみて間違いない。彼女は、ブレズレン之教義を忠実に守るようにと努めている。具体的には、ダニエル之教えに従って生きようとする。彼女は、ブレズレン之信仰がカトリック之教義と対立することを意識している。一方ではロバートに惹かれながら、他方で、自己之宗教を優先しようとした結果が、マルカムとの結婚之決意である。猩紅熱で絶望的な状態に陥るまでは、彼女はブレズレンに背くような振る舞いはしなかった。カトリックへの改宗という道は選択肢にならなかった。その点で、カトリックから見れば、彼女之態度は頑固で保守的であると言えよう。エキュメニズムとは無縁だった。したがって、一旦は、ロバートに対して永久之別れを宣言したのである。

ジーンとロバート之宗教に対する態度を比較すると、即座に大きな違いに気づく。ジーンは宗教的に両親に從順だった。一度は、マルカムと生きる道を選んだ。ロバートは宗教とは疎遠である。他人之宗教の問題には容喙しないという寛容さをみせる。このような二人が結婚するためには、何か決定的な経験が必要である。

ジーンとダニエル之宗教がロバートとジーン之恋に及ぼす影響については次章で論じる。

本章では、ロバートとジーンの恋と結婚の障害を論じる。端的に言えば、それは二人の宗派の違いとその付随的事情（ジーンと同じ宗派の信者である彼女の家族とマルカム）である。結婚を実現するためには、ジーンがロバートの宗派を受け入れること、ジーンが家族が結婚に賛成すること、マルカムがジーンとの婚約を解消することが必要である。ジーンが家族のうち、ルークは熱心な信者ではなく、ロバートの恋を支持する傾向が強いので障害にはならない。ジーンが母親は、専ら泣くことによってジーンとロバートとの関係に対する抗議を示すに過ぎないので、強力な障害とは言えない。

以下、ロバートの恋に対するダニエルが干渉とマルカムの宗教的詰問およびジーンが葛藤という3種の障害を論じる。

まず、ダニエルという障害について検討する。ジーンが一度目の医師資格試験が失敗に終わったとき、ダニエルがロバートを訪問する。ジーンとたびたび会っている理由を訊かれて、ロバートは“‘Well...as a matter of fact...I’m very fond of her [Jean].’” (120) と答える。ダニエルは、両親も彼女を愛していること、娘が試験に不合格だったことを知って落胆したこと、再受験させること、ロバートにジーンとの関係を断ってほしいこと、ジーンは同じ宗派の者と結婚するのでなければ幸福になれないことを説く。ロバートは、“Religion is a private affair. We [Robert and Jean] can’t help what creed we’re born into. It’s quite possible for two people [Robert and Jean] to be tolerant of each other’s belief.” (121) と言って反駁する。ロバートにとっては、宗教は個人的な問題である。どのような信仰の家に生まれるかという問題は個人ではどうしようもない。信仰が違う者同士でも互いに寛大になれると主張する。彼は、宗派よりも愛情を重視している。しかし、ダニエルは、カトリックのロバートがプロテスタントのジーンと結婚することはできないと告げる。続いてダニエルは、マルカム・ホッドンがプリマス・ブレズレンの教徒であり、将来ジーンと結婚することになっていると宣言する。ダニエルは冷静沈着で毅然たる態度の男である。この二人を説得しない限り、彼とジーンが結婚はあり得ない。

次に、マルカムについて説明しよう。まず、マルカムは、極めて冷静で、頑丈で、現実的で、頼もしく、立派な体型の人物である。自分の信念に従って生きることにより少しも疑念を抱かない、ダニエルと似たタイプの男である。ロバートの結婚にとって、マルカムという障害はますます重大になる。

この小説の第4編3章、ジーンが卒業式の場面で、ロバートとマルカムが恋敵同士として議論する。マルカムが、ロバートとジーンは不釣り合いであると言うと、ロバートは、自分はジーンを愛していると明言する。すると、マルカムは、“But love isn’t marriage.” (226) や “‘That [marriage] is a serious undertaking. One simply cannot rush into it. You [Robert] would be wretched, married.’” (226-27) と言って反論する。マルカムは恋愛と結婚は別問題であると考え、あわてて結婚すれば不幸になると主張している。その後の会話をみることにする。

“How can you [Malcolm] tell? We [Robert and Jean] would take our chance. Marriage is something inevitable...a calamity, perhaps, from which there is no escape...but not a blueprint for a new mission hall.”

“No, no, Shannon.” He [Malcolm] countered my jibe with greater earnestness. “Marriage should

confirm, and not disrupt two lives. Before you met Jean everything was arranged...her work... her life. She was settled, contented in her mind. And now you are asking her to give up all this, to estrange her family, cut herself off from the very sources of her being.”

“None of these things need happen.” (227)

二人のこの応酬については、ロバートの分が悪い。彼は、結婚は不可避なもの、ことによると逃れることのできない不幸であると主張しているが、それに対するマルカムの反駁の方が合理的にみえる。マルカムはまた、ジーン的生活はすべて取り決められており、彼女はそれに満足している、それなのにロバートは彼女に、それをすべて諦め、家族を遠ざけ、彼女の生の根源から孤立するようにと頼んでいるのだと言って責める。ロバートはそのようなことは起こらないと言うが、それに対してマルカムは、ロバートがジーンの所属している教会堂の礼拝に出席するかと質す。ロバートの答えは“No.”である。するとマルカムは、混宗婚のカップルの子供の不幸を挙げたり、カトリックの教会が混宗婚に反対していることを指摘したりすることによって、ロバートとジーン結婚は実現の見込みがないと断定している。続いてマルカムは、この日、ロバートが現れるまではジーンが幸福を取り戻していたこと、ロバートはいつも彼女を傷つけたいと思っているような人物ではないこと、したがって、ロバートの優しい気持ちがジーンを欲する気持ちに勝る（結婚を諦める）に違いないと言う。ロバートは、マルカムを憎まないようにと努めながら、自分がますます無法者だと感じる。マルカムの理屈は正論であるため、ロバートの反論は打破された形である。彼の恋が成就する可能性はさらに絶望的にみえる。マルカムという障害は強敵である。

ここで、混宗婚について、ある事典の説明を借りたい。

英語でいう、「mixed marriage」とは、宗教の違う結婚（ムスリムとキリスト教徒など）、または国籍や人種の違う結婚（アメリカ人と日本人、黒人と白人など）のことだが、この「ミックスト」には、キリスト教徒同士のケースも含まれる。たとえ同じ神を信仰していても、ローマ・カトリック教徒とプロテスタント教徒では「宗教が違う」と認識され、家族からも教会からも結婚を反対された時代が長かった。こうした「混宗婚」を選んだ信徒を破門の対象にした教会もあるし、地域によってはこうした結婚そのものを法的に禁じたり、「混宗婚」から生まれた子どもの宗教を指定していた時代もある。トラブルを避けるため、どちらかが改宗（転会）して信仰を同一にした上で結婚するか、結婚自体を断念するカップルも多かったようだ。²⁶

ロバートとジーン結婚は、宗派の異なるキリスト教徒間の結婚に相当するが、その場合でも結婚は多難または不可能だったことがわかる。日本人の視点から見ると、宗派の違いは重要な問題とはならない場合の方が多いと思われる。日本では、配偶者の一方がキリスト教で、他方は仏教または無宗教という例もみられるが、それが家族や親族の人生に影響を及ぼす例は少ないであろう。しかし、他の宗教、特にキリスト教にあっては信仰の相違は重大な問題である。

なお、マルカムにはロバートと対照的な相違がみられるので、それを説明したい。それは、恋に対する情熱の欠如である。例えば、ロバートとジーンは明らかに恋愛関係にあったが、マルカムとジーンの関係には曖昧で謎めいたところがある。後者両名は幼馴染みで気心も知れているはずである。ロー家の家族の一員同様に扱われている。しかし、二人の間には恋愛感情は全く存在しない。二人は、事務的で機械的に結ばれているに過ぎず、同じ宗派の信者であること以外に共通点は発見できない。

マルカムのジーンとの結婚の目的は、布教に役立てることにあるのかもしれない。それは、既に引用した、“‘But love isn’t marriage.’” (226) という彼の言葉に表れている。

続いて、ジーンと葛藤という障害をみることにしよう。既に述べたように、ロバートとジーンの恋の口火を切ったのはジーンである。少なくとも、恋の初期の段階では、主導権はジーンが握っている。ロバートが受け身である。彼女は、ブレアヒル (Blairhill) の実家にロバートを招待したとき、既にロバートに恋をしていたとみなすことができる。その後、二人は疎遠になり、一旦は二人の関係は全く消滅するかのようと思われるが、ジーンからの提案で、二人の「友情」が始まる。彼女は、ロバートに友人関係を結びたいと言うのである。彼女は、次のように話す。

We [Jean and Robert] do belong to different religions, but although that’s a serious thing, it isn’t a crime, at least it’s no bar to our having an occasional cup of tea together. It would be a great pity if we stopped being friends, simply for nothing...and drifted apart...like ships that pass in the night....” (94)

ジーンは、自分とロバートが異なる宗教に属していても、罪ではなく、友人として会う上での障害とはならないと言っている。「友情」の復活を懇願している。このように、和解の提案、実は懇願するのはジーンの方であり、ジーンの方に恋の弱みがあるようにみえる。ロバートも心中嬉しくてたまらない。

しかし、ジーンは、家族やマルカムとロバートとの間に挟まれて動揺するので、ロバートが苦しむ羽目に陥る。二人の恋は、彼女が信仰を意識しないときには進展し、家族の下にあって信仰に縛られるときには後退または中断する。ジーンは恋と宗教の二者択一を迫られる。彼女の陰性の面が支配的になるとロバートから遠ざかり、陽性が優勢になると再び恋に夢中になる。

その後の二人の関係については、例えば、次のように書かれている。なお、説明の便宜上、番号を付した箇所がある。

(1) All that lingering summer, which, by the dreamlike beauty of its days, conspired to defeat the force of reason, we [Robert and Jean] had drawn more closely to each other. (2) I [Robert], perhaps, was a willing victim, but my companion [Jean], by her temperament and denomination, by every intimate beat of her family life, was better able to appreciate the barrier to our attachment which, on that evening at Markinch, had been blindingly revealed to her. (3) Bound by the web of parental ties, enclosed by the inexorable limits of her creed, no nightmare was more fearful to her than the grim phantom of my religion. (116)

(1) の文によって、夏 (1920 年) の日々が夢のように美しかったため、二人は理性を失って、互いにより親密に惹かれ合うようになったことがわかる。(2) では、ロバートの方がジーンよりも進んで恋の喜びを享受したこと、彼女はその気質と宗派により、また、家族との親密な生活を優先したいとの思いから、二人の愛情を阻む障害をロバートよりもよく認識できたこと、ジーンはその愛情をマーキンチ村で夕方を過ごしたときはっきりとわかっていたことが書かれている。(3) は、ジーンが親との絆にがんじがらめになっており、自分の宗派から混宗婚を禁じられているので、ロバートの宗教という気味の悪い幻影ほど恐ろしい悪夢は他にはなかったことが述べられている。したがって、ジーン

は宗派の違いを強烈に意識していたと言える。このような状況が、二人の結婚の障害になる。この引用部の後では、ジーンは二人の恋は不可能であることを再三主張しながら、互いを諦めるのが無理だと気づいたことや、二人が恋に夢中になっていたことが書かれている。

その後数ヶ月間、二人の恋は封印されている。ジーンはベスナル・グリーン（Bethnal Green）の叔母エリザベス（Elizabeth）の家へ移され、4ヶ月間試験勉強のために滞在する予定である。ジーン宛の手紙は別の叔母（Mrs. Russell）が先に開封する。ベスナル・グリーンはロンドン郊外にあり、ウィントンから300マイル以上離れている。ロバートが再会できる見込みは皆無である。

二人が再会できたのは、1921年早春だった。ある実験室を借りて、一緒に研究に従事する。ジーンがロバートの助手の格好である。ジーンは恋愛関係を解消することを条件に協力の要請に応じたので、ロバートは恋の想いを押し殺している。それからの毎日が、二人にとって充実した実験活動の時間になった。3ヶ月が過ぎる頃、研究は成功する。二人は有頂天になるあまり、実験室で一度だけ恋愛関係を復活させてしまう。ロバートは節欲を破ったことになる。ともに激しく後悔する。特にジーンは、良心の呵責に苦しみ、二度とロバートには会えない、会ってはならない、と手紙に書く。彼女は自分の宗教に忠実に生きようとする姿勢を見せる。依然として、彼女の信仰心がロバートとの恋ひいては結婚の障害として機能する。ジーンに対するロバートの愛慕は変わらない。

ジーンとの別離の後でロバートはイースターショーズ（Eastershaws）にある精神科病院へ住み込みの医師として勤務する。ロバートの頼みに応えて、ジーンはイースターショーズに面会に来る。二人の間にはぎこちない雰囲気が漂う。ロバートは、実験室での出来事について謝罪する。すると、ジーンは、“It is terrible to fall in love against one’s will,” (232) と、また、“When I am with you [Robert] I no longer belong to myself.” (232) と意味深長な返事をする。“against one’s will” と一般論として述べているが、実はジーンは自分について言っているわけである。したがって、彼女がロバートと恋に落ちたのは不本意だったという意味に解釈できる。彼女は、ロバートと一緒にいると本来の自分を失うと言うが、これは、彼女の二面性のうちの陽性が支配的になることを意味する。この直後、ロバートは、プロポーズする。ジーンは、“It [their marriage] is impossible.” (232) と言って拒否する。ジーンは、さらに、“I have to tell you, Robert. I am going away for good.” (233) と別れを宣告する。彼女は、マルカムと結婚し、3ヶ月後に西アフリカへ発つと告げる。ジーンは医者として、マルカムは現地のセツルメントの校長として働くことになる。出発までは、ジーンは、ロバートの元の勤務先ダルネア小病院で働く。ジーンは、“If we [Jean and Robert] had never met...it would have been better. With us, there is a penalty for everything.” (233) と言う。彼女は、ロバートと恋に落ちたことを深く後悔している。彼女は、マルカムを愛していると言う。ロバートは必死になって、ジーンの恋を取り戻そうとするが、ジーンには既にとりつく島がない。彼女は、ロバートとの別れに苦悩しながらも決然と去ろうとする。ロバートは絶望する。

ロバートは、ここで、結婚の実現にとっての致命的な壁に直面する。それは、ジーンが、家族とマルカムと宗教への帰属または服従を決心したことである。彼女はロバートとの結婚を諦めて、マルカムとの結婚の道を選択した。それは、子供時代に彼女のために敷かれ始めた軌道へ戻ることを意味する。彼女は、ロバートとの恋よりも信仰を優先したとすることができる。しかし、ジーンはその恋に未練を残していたに違いない。後ろ髪を引かれる思いでロバートから去って行った。その様子は、ロバートとの別れの場面に現れている。

本章では、結婚の障害がどのように消滅したのかを論じる。ロバートは、おそらく、過労とエヴァンス博士 (Dr. Evans) というアメリカの研究者に同じ研究を先に発表されたことによる失意と失恋の痛手からイースターショーズで意識を失い、ローモンド・ビューで静養している。祖父方の曾祖母レッキー (Leckie) の親身の世話を受けている。

手元の新聞は、アルゴア (S. S. Algoa) という船の本日出航というニュースを報じている。ジーンとその「夫」のマルカムが乗船しているはずである。ロバートは、その記事を読んで、ジーンとの恋が完全に終わったと信じる。それから1時間ほどたったとき、ジーンが現れる。ロバートが開業医になると聞くと、ジーンは断固として反対する。開業医をけなすのではなく、ロバートには向いていないと言う。彼女は、ロバートにローザンヌ大学 (the University of Lausanne) での確実な仕事をもたらす。しかし、彼にはローザンヌで再出発をする自信はなく、その仕事には向いていないと弱音を吐く。するとジーンは、引き受けなければいけない、ロバートの未来はその仕事にかかっている、敗北を認めてはいけない、と主張する。ロバートがなお消極性を見せると、ジーンは自分が彼を助けると言う。驚くロバートに、ジーンは次のように話す。アルゴアはマルカムだけを乗せて出航した、彼女が病床に就いていたとき、彼女は両親や彼女と一緒に働くことになる人たちに対しての義務は認識していたが、世界中で最愛のロバートに対しての義務についてはそうではなかったことがわかった、なぜロバートの求婚を拒絶したのか病床で考えていた、その理由は、彼女の自尊心と、ロバートの宗教に対する彼女の恐れと偏見だった、と。ジーンは、瀕死の状態から蘇生することによって、本来の彼女にふさわしい生き方を認識し、宗教の束縛から解放されたと解釈できよう。その後、宗教の問題について彼女は次のように述べる。

God had caused you [Robert] to be born a Catholic and me [Jean] a member of the Brethren. Did that mean He hated one of us and loved the other...wished that one should live in the darkness of lies, and the other in the light of truth? If so, Christianity was meaningless. Oh, Robert, you were kinder towards my belief than I was to yours. And I felt so terribly ashamed I told myself, if I got better, I would come and beg you to forgive me.” (287)

ジーンの言葉は神の愛の本質を問うものである。彼女の主張は正しいと言えるであろう。キリスト教の神は一神教であるから、宗派によって神の解釈が異なるのは奇妙である。ジーンはまた、ロバートの方がジーンの宗教に対して寛大だったと言うが、これももっともである。彼は、宗派の違いについて、ほとんど拘泥していないからである。ジーンは、“Oh, my [Jean’s] dear, I’ve left Blairhill, left my parents, left everything, for good. And if you [Robert] still want me, I will marry you, when and where you wish....We will go to Lausanne...work together...be kind and considerate of each other” (287) と打ち明け、求婚する。このように、ジーンはブレアヒルを、両親を、すべてを永久に捨ててロバートと一緒に生きる道を選んだ。彼女の宗教とも縁を切った。彼女の葛藤は消滅した。主人公対ヒロインの親和力は、彼女とマルカムとのそれに比べてはるかに強力だった。ロバートは、ジーンと生きる道を選ぶ。本作の最後の記述を引用しよう。

I [Robert] was no longer alone, darkness had turned to the light of day, life was for ever remade. We [Robert and Jean] should make our way into the unknown together. Yes, in the mystical warmth of that moment everything became possible, there was no thought of failure, and happiness seemed eternal. (287-88)

ロバートは、研究の道を諦めジーンを失い孤独に戻る寸前だったが、ジーンと同様に再生した。結婚の障害はジーンの劇的な変心によって消滅した。その変心の詳しい経緯は十分には明らかにされていないという観があるが、瀕死の状態から蘇生するという体験を通じて、彼女はロバートに対する自分の恋を率直に見直すことができ、彼女にとって最も重要な人物が誰であるのかを認識したのだと考えられる。駆け落ちのような形で家族と婚約者を捨てたという行動は、ロバートに対する愛情の深さを示すのであろう。しかし、ダニエルやマルカムの、ジーンの選択に対しての反応については全く触れていない点が少し物足りない気がする。現代であれば、エキュメニカルな形²⁷での混宗婚も可能であるが、この物語の展開する時代には、そのような選択肢は不可能であったに違いない。1920年代に混宗婚を実現するには、多大な困難と反発を覚悟しなければならなかったわけである。

この作品のプロットから、同じキリスト教であっても、異なる宗派の間には越えがたい壁が存在し、衝突や軋轢が生じやすいことが理解できる。しかし、筆者は、どのような宗教であれ、生活の質を高め、精神を鍛錬し、倫理を教え、人間全体にとっての幸福に貢献するものならば、その宗教の役割は十分に果たされていると思う。以上で本論を終了する。

9

本論の内容を簡潔にまとめると、以下ようになる。主人公ロバートはカトリックであるが熱心な信者とは言えない。彼は、多くの美点を備えている。宗教の問題を話題にすることは控え、自己実現の意欲が高く向上心が強い。精力的で勤勉で自立心に富む。実直で友情に篤く信頼性が高く拝金主義と無縁である。医師として優秀な資質を持ち、自己を客観的に観察することができ、温厚である。他方、虚言を弄したり、独善性や自己本位に陥ったり、軽率さをみせるという短所もある。全体としては、愛すべき人物である。生き方は潔癖でフェアである。ジーンとの結婚は妥当な結末である。ジーンは、敬虔なプロテスタントである。純真で気取らず若々しく潑刺としたところがあり、清潔である。聡明で有能、善良で勤勉である。陽性対陰性、行動的対思索的、積極的対消極的、能動的対受動的という、性格面の対照的な二面性が見られる。あえて短所を挙げるなら、自分と自分の家族やマルカムの立場を重視する傾向が強く、ロバートに対する配慮が不足していた点のみであろう。それは、物語の最後で彼女が認めていることである。彼女の生き方は誠実で真摯である。二人の結婚の実現に対しては、マルカムや宗派の相違、ジーン自身の躊躇と苦悩という障害が存在した。そのため、ロバートとジーンとの結婚は不可能と思われたが、ついに、ジーンの劇的な覚醒によって幸福な結末を迎える。この展開は、宗教の違いよりも愛情の方が重要であることを示唆している。宗教は伝統的文化の一種であるから、人間の愛情に譲歩するという暗示を含んでいる。結婚後の二人は、宗教上の問題に直面するに違いないが、作品の最後に書かれているとおり、幸福が永続するだろう。

次に、*Shannon's Way* の作品としての価値について触れたい。恋愛または結婚を主題とする小説はこれまでに多数書かれたが、たいていの場合、結婚の障害は、恋愛当事者の性格、思想、社会的地

位あるいは資産等である。*Shannon's Way*のように、主として宗派の相違が障害として提示された作品は珍しい。その意味で、この小説はユニークである。

クロニンについて、“Cronin’s strengths were his narrative skill and his powers of acute observation and graphic description. Though labeled a successful middlebrow novelist, he managed to create in *The Stars Look Down* a classic work of 20th-century British fiction.”と評価する事典がある。²⁸ これは、的確な指摘である。少なくとも、モームと同等の力量の作家である。*The Stars Look Down*（邦題『星の眺める下で』）は、1935年に出版された長編小説であるが、*Shannon's Way*にも、その長編に劣らないほど独自の面白さがある。

続いて、この作品に込められた、作者のメッセージについて考えてみたい。それは、第一に、宗派の違う者同士が結婚を望む場合には、多大な困難や障害が避けられないことである。恋の当事者ばかりではなく、家族全員を巻き込む問題に発展する可能性が高い。通常は、混宗婚は不可能かもしれないという暗示が感じられる。第二に、愛情は宗教を凌駕する、愛情の力の方が信仰よりも強力であるという主張がこの小説には含まれている。クロニンは、自分の両親の結婚からヒントを得て、この作品を著したに違いないと思われるが、彼は混宗婚を肯定し、宗教という文化は愛情ほど重要ではないとみなしているように見える。

最後に、この作品には幾つかの謎がある。例えば、小説冒頭の初めの文を読むと、1919年12月5日は、ロバートにとって何らかの大きな変化が起きた日であることがわかるが、それが具体的にはどのような出来事を指すのかが不明である。もし、この日の夜、ジーンのレポートを点検したことを意味するとすれば、彼の恋はブレアヒル訪問よりも先に始まったことになる。また、ジーンにはマルカムという婚約者があるのにロバートを実家に招待した理由は何か、という疑問も謎の一つである。マルカムは25歳くらいの青年でブレアヒル小学校の教師である。ロー家に親しく出入りしている。ロバートとジーンの恋と結婚にとっては、マルカムの存在が障害になるはずであるが、ジーンの心境が不明である。ジーンは宗派の相違を深刻に受け止めているにも拘らず、マルカムについては恰も無視同然の態度をとることも理解しがたい謎である。さらに、ロバートとジーンが芝居を観た直後、ジーンの時計が一時的に行方不明になるが、このエピソードの意義あるいは役割がわかりにくい。最後に、シムの死の責任はロバートにあると誤解したアレックスから絶交を宣言されたとき、なぜロバートは真相を告げなかったのか、という疑問もある。このような問題については、別の機会に発表したい。

注

1. 以下、このような番号は本稿の章番号を示す。
2. 混宗婚については、95ページ参照。
3. 『ブリタニカ国際大百科事典 2013 小項目版』（以下、『ブリタニカ』と略記）「クロニン」の項目。『ブリタニカ国際大百科事典 2013 小項目版』CD-ROM. 東京：ロゴヴィスタ株式会社，2012年。
4. 例えば、*The Oxford Companion to English Literature* (ed. Dinah Birch, 2009, seventh edition) は、クロニンの説明にわずか10行を当てているに過ぎないが、モームにはその約5倍の行を割いている。この扱いから、クロニンは軽視されていると言わざるを得ない。
5. 羽矢謙一・虎岩正純編著『20世紀イギリス文学研究必携』，東京：中教出版，昭和60年，p. 276。なお、*Adventures in Two Worlds* は1952年に出版された作品で、『人生の途上にて』というタイトルで三笠書房から翻訳が出ている。

6. *Encyclopædia Britannica Ultimate Reference Suite* は, “A. J. Cronin” の項目で, “Scottish novelist and physician whose works combining realism with social criticism won a large Anglo-American readership.” と説明している (下線は筆者)。
7. 以下, これらの作家の①純文学作品と②大衆文学作品の例を示す。クロニン: ①城砦 (*The Citadel*, 1937) ②『恐怖からの逃走』(*Escape from Fear*, 1954), モーム: ①『月と六ペンス』(*The Moon and Sixpence*, 1919) ②「エドワード・バーナードの転落」(“The Fall of Edward Barnard,” 1921年に出版の *The Trembling of a Leaf* 所収), グリーン: ①『権力と栄光』(*The Power and the Glory*, 1940) ②『第三の男』(*The Third Man*, 1950)。
8. () 内の数字は, A. J. Cronin, *Shannon's Way* (Sevenoaks: New English Library, 1985) のページを示す。以下, 作品からの引用はすべて同書による。
9. “the Lister Gold Medal” は架空の名前のようなものである。
10. この引用中に 3 dots と 4 dots があるが, これらはすべて原文に含まれる記号である。以下, *Shannon's Way* からの引用についてはすべて同様である (論文筆者が, 引用文中で語句を省略した箇所は 1ヶ所もない)。
11. 研究社『新英和大辞典第6版』の説明を借りれば, この人物は「Shakespeare の劇 *Henry IV* と *Merry Wives of Windsor* に登場する人物; 陽気で頓知に富み, ほら吹きの肥満した騎士」である。
12. Dale Salwak, *A. J. Cronin* (Boston: Twayne Publishers, 1985), p. 99.
13. トム・ジョーンズはフィールドイング (Henry Fielding, 1707-1754) 作の長編小説 (*Tom Jones*, 1749) の主人公。
14. 佐藤猛郎・岩田託子・富田理恵編著『図説 スコットランド』, 東京: 河出書房新社, 2005年, p. 103。
15. この知識は, 次の書物から得たものである。指昭博編著『はじめて学ぶイギリスの歴史と文化』, 京都市: ミネルヴァ書房, 2012年, pp. 49-50。
16. 出口保夫・小林章夫・齊藤貴子編『21世紀 イギリス文化を知る事典』, 東京: 東京書籍, 2009年, p. 167。
17. A. J. Cronin, *Adventures in Two Worlds* (Sevenoaks: New English Library, 1985), p. 239.
18. 『ブリタニカ』「ジョン・ノックス」の項目 (一部略)。
19. 『ブリタニカ』「ボイン川の戦い」の項目 (一部略)。
20. *Shannon's Way* の中では, “Plymouth Brethren” という言葉は一度も使われていないが, “Brethren” が “Plymouth Brethren” を指していることは, 次の事典の説明によって判明した。David B. Barrett (編), 竹中正夫 (日本語版編集長)『世界キリスト教百科事典』東京: 教文館, 1986年, p. 960 と p. 984。
21. E. A. LIVINGSTONE Assisted by M. W. D. SPARKS and R. W. PEACOCKE, *The Concise Oxford Dictionary of The Christian Church*, THIRD EDITION (New York: Oxford University Press, 2013), p. 447.
22. 『ブリタニカ』「ダービー」の項目。
23. 金岡秀友ほか 24名『改訂新版「世界の宗教と経典」総解説』, 東京: 自由国民社, 1989年, p. 86。
24. “Plymouth Brethren” は “The Church of the Brethren” とは別物である。後者は, 「同胞教会, 兄弟の教会《1908年以降の German Baptist Brethren の正式名》」である。
25. 『ランダムハウス英語辞典』, CD-ROM, 東京: 小学館, 1994年, “Paul” の説明。
26. 八木谷涼子『なんでもわかるキリスト教大事典』, 東京: 朝日新聞出版 (朝日文庫), 2012年, pp. 266-67。
なお, 同書は, 混宗婚の実例として, ブロンテ姉妹の父パトリック (Patrick Brontë, 1777-1861) と小泉八雲ことラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn, 1850-1904) の両親を挙げている。
27. 「エキメニカルな形」とは, 次の書物の中に見られる言葉で, 混宗婚を指す。徳善義和・百瀬文晃編『カトリックとプロテスタント——どこが同じで, どこが違うか』, 東京: 教文館, 2002年 (6版), p. 191。

28. “Cronin, A. J.” *Encyclopædia Britannica Ultimate Reference Suite* (2014) CD-ROM.

引用文献

Cronin, A. J. *Shannon's Way*. Sevenoaks: New English Library, 1985.

---. *Adventures in Two Worlds*. Sevenoaks: New English Library, 1985.

E. A. LIVINGSTONE Assisted by M. W. D. SPARKS and R. W. PEACOCKE. *The Concise Oxford Dictionary of The Christian Church*, THIRD EDITION (New York: Oxford University Press, 2013).

Salwak, Dale. *A. J. Cronin*. Boston: Twayne Publishers, 1985.

Encyclopædia Britannica Ultimate Reference Suite. DVD. Chicago: Britannica, 2014.

金岡秀友ほか 24 名『改訂新版「世界の宗教と経典」総解説』 東京: 自由国民社, 1989 年.

佐藤猛郎・岩田託子・富田理恵編著『図説 スコットランド』 東京: 河出書房新社, 2005 年.

出口保夫・小林章夫・齊藤貴子編『21 世紀 イギリス文化を知る事典』 東京: 東京書籍, 2009 年.

羽矢謙一・虎岩正純編著『20 世紀イギリス文学研究必携』 東京: 中教出版, 1985 年.

八木谷涼子『なんでもわかるキリスト教大事典』 東京: 朝日新聞出版 (朝日文庫), 2012 年.

『新英和大辞典第 6 版』 CD-ROM. 東京: 研究社 (発売はロゴヴィスタ株式会社), 2007 年.

『ブリタニカ国際大百科事典 2013 小項目版』 CD-ROM. 東京: ロゴヴィスタ株式会社, 2012 年.

『ランダムハウス英語辞典』 CD-ROM. 東京: 小学館, 1994 年.

(なかむら たけし 英語コミュニケーション学科)